文化祭を觀る

嘉東　鴻吉

終戦後の學生演劇は、新劇の華々しい發足を相俟って、一應時代の要求に應へた。そして、過去の殘骸でしかない、銀幕本位の新派劇や、時代劇を一蹴して、現實と實態の新劇（時代劇）樹立の旗手は解放された歡喜の躍動と共に新劇のみが許された。高等現想主義の形態の中に、學生演劇の發展は實に目ざましいものがあった。併し敗戰と言ふ現實が決して日本人を眠ざましたのでなかった。當然の結論として、切角の新劇も再び淵落の要を目を見てしまった。原因は當事者にもある、それは時代は變つても新劇古典脚本のむしかくしと、新劇經營者の無自覺と、無反省、新劇人の貴族的、獨善主義の經綸の結果であった。

多渦中に卷き込まれて行つたのが學生演劇である。未だ地方文化は目標さへも定まらぬ中に、學生演劇の發展は實に目ざましいものがあった事は、內閣の解散や暗電事件よりも遙かに重大な問題であつた、それは我等國民は文化國家として祖國を愛するからである。

親父が死ねば粋が相續する、軍道的な運命に余儀なくされて、戰災の身を川內に落着けて二年、川內川は時に逆流して時代の暗潮を語り、故山は壓迫と、震動を警示し、ゆゑに戲感の中に私をささへてくれた文化、それもあけなく放心性態に追込まれて、霧靄の中に蹴きつゝある時光期のように浮び上つて來たものは、川高の文化祭であつた。

濁流の中に浮き沈みする都會の學生演劇を尻目に、此處南九州の一隅、川內に而も氣樂な學生演劇を見た事は、驚きと共